



災害に強いまちづくり 市とコミュニティの役割分担と協力体制

コミュニティ推進協議会は、「東日本大震災」の体験を活かし、災害時における市とコミュニティの役割分担と連携協力、自主防災活動を市と協働で進めてきました。災害時の要援護者の避難誘導體制の確立などを含めた防災訓練の充実、防災マップなどの活用、備蓄倉庫の設置などの取り組みが少しずつ実現しています。

市と役割分担で防災訓練

昨年11月に実施された茨城県・日立市総合防災訓練では、避難所である小・中学校や交流センターで、住民避難を支援するための東日本大震災後、初の市とコミュニティが役割を分担した訓練となりました。

各避難所では市災害対策本部への連絡や情報収集、住民の受付等は市職員が担当、災害時要援護者への連絡などの対応、防災倉庫の備蓄品に関することはコミュニティで担当するなどの訓練が行われました。想定

できない災害に対応できる仕組みづくりの第一歩の訓練となりました。



避難所も役割分担をして運営

防災マップも共同作業で作成

現在、日立市では平成16年9月

に作成した学区単位の防災マップの改訂を進めるため、コミュニティ単会と共同で、掲載されている内容等の確認や見直し作業を行っています。

災害時の一時避難場所、公衆電話の場所、生活必需品の取扱店舗である商店やコンビニ、病院や医院、危険物取扱所などをはじめ、避難経路や災害時応援協定事業所など、学区住民の参考となる単会独自の項目も掲載される予定です。

この防災マップが完成すれば災害時や防災訓練などにも活用されることとなります。

会長研修会

日頃の取り組みと責任者の力量

コミュニティ推進協議会の会長研修で、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県仙台市と福島県南相馬市を訪問しました。



災害に備えるヒントを学ぶ

仙台市福住町内会や仙台市高砂市民センターでの避難者支援活動、南相馬市では津波被災状況や、福島第1原発から半径20キロ圏内の旧警戒区域で復旧半ばの状況を目の当たりにしました。

仙台市福住町内会の菅原康雄会長は「宮城県沖地震に備えて訓練を行い、対策を立て、特に“減災”に力を注いできた。被害が大きければ大

きいほど公的援助は望めない。

東日本大震災時には直ちに町内住民の安否確認を行い、町内会集会所に住民の避難誘導をした。公園にトイレを設置。津波による人的被害は少なく、翌日、区災害対策本部に連絡した。公的避難所は本当に大変な人のために空けておくようにと、避難訓練の時から指示していたこともあり、住民約100名が集会所に避難した。

飼っている動物と一緒に避難することも必要。無料で予防注射や治療、避難動物の預かりも行った。

交流のあった地区から次々と支援物資等が直接届けられた。顔の見える支援は自分たちを大いに奮い立たせた。支援物資の送り方にも工夫が必要。もらった支援物資を他の被災地の公的避難所以外に運搬した」と日頃の備えや自助、共助の重要性を伝えました。

当時、仙台市高砂市民センター館長を務めていた（現在：震災復興支援グループ『きぼう』代表）浅見健一さんは「高砂市民センターは指

定避難所ではなかったので食料や毛布は届かなかったが、避難してくる人を拒むことはできない。避難所のルールづくりも重要」と話しました。

また、送迎バスで帰宅途中だった幼稚園児や職員が大津波の犠牲になり尊い命が失われた事を話し、震災復興支援グループ『きぼう』が取り組んでいる救命胴衣1000着目標の『救命胴衣支援プロジェクト』への支援を呼び掛けました。この研修の参加者で2着分の協力をしました。

茨城県自治会連合会情報交換会 大震災後の取り組み・ウミウの生態

昨年12月21日、茨城県自治会連合会主催の情報交換会が、国民宿舎「鶴の岬」カントリープラザで開催され、約170名が参加しました。

事例発表は「東日本大震災後の復興に向けた新たな取組」について久慈学区コミュニティ推進会の須田昭会長が担当。「ウミウの生態や捕獲方法について」ウミウ捕獲技術保持者の根本好勝さんが講演、ウミウ捕獲場の見学も行われました。

『行政とコミュニティ活動のあり方検討委員会』の提言に基づく取組状況

「再生資源の回収システムのあり方」と「市報の配布方法のあり方」について、課題解決に向けて、実態把握のため、市役所関係各課と協力しアンケート調査を実施しました。協力いただきました皆様に感謝いたします。調査結果の主な内容は以下のとおりです。今後、この結果を基に新たな取り組みを提案していきます。

【再生資源の回収システムのあり方】 調査期間 平成24年11月下旬



対象者	無作為に抽出した2,100世帯 (回収率 約47%)
実施目的	集積所の利用状況や管理方法に対する実態調査のため。
調査結果	1 再生資源学区回収制度の利用度について 利用している 82% 利用していない 18%
	2 「1」の利用している世帯のうち、回収袋など物品の設置、片付け、分別指導など当番制の実施について 実施している 95% 実施していない 5%
	3 もっとも多かった当番制度の開始、終了時間について 開始時間 7時 26% 終了時間 8時30分 44%
	4 再生資源学区回収制度を利用しない(できない)理由について 1位 町内会に加入していないため(31%) 2位 排出時間までに間に合わないため(11%) *新聞業者など民間の排出場所を利用しているため *清掃センターに持ち込む方が利便性が良い *仕事等により排出日時との調整がつかないため(*その他多かった意見)
今後の進め方	課題解決のために市民と行政で設置した「再生資源等の回収システム研究会」では、高齢者や身体の不自由な方、乳幼児がいる世帯や共働きの世帯などに配慮した仕組みを考えるとともに、平成25年度中にモデル的な取り組みを実施し、より具体的な回収システムを提案したい。

【市報の配布方法のあり方】 実施目的：市報配布梱包作業に対する実態把握のため 調査期間：平成24年7月～9月

対象者	各学区の配布推進員 3,642名 (回収率45.57%)	各学区の市報梱包員 382名 (回収率59.68%)
実施目的	市報配布梱包作業に対する実態把握のため。	
調査結果	1 負担感について 負担である 25% どちらともいえない 28% 負担ではない 45% 無回答 2%	1 負担感について 負担である 33% どちらともいえない 28% 負担ではない 36% 無回答 3%
	2 負担である理由 1位 月2回の配布が多い(33.6%) 2位 同時配布物が多い(26.7%)	2 負担である理由 1位 同時配布物が多い(37.5%) 2位 月2回の作業が多い(23.6%)
	3 負担ではない理由 1位 コミュニティ活動の大切な作業である(49.7%) 2位 人と人とのつながりができて楽しい(20.9%)	3 負担ではない理由 1位 人と人とのつながりができて楽しい(38.4%) 2位 情報交換の場となっている(31.7%)
	4 市報の配布方法について 1位 従来通り(29.9%) 2位 市報発行回数を減らす(18.1%) 3位 同時配布物を減らす(12.8%)	4 市報の配布方法について 1位 同時配布物を減らす(28.3%) 2位 市報発行回数を減らす(17.3%) 3位 従来通り(16.5%)
今後の進め方	市報配布梱包作業は、約半数の方がコミュニティ活動の一環として重要であると感じているが、同時配布物の削減などの課題が明らかとなったため、今後コミュニティ推進協議会、市民活動課、広聴広報課で連携を図り、課題解決に向けた検討を進める。	

県主催・地域づくり人材育成講座 新しい協働のかたちを学ぶ

今年も県主催の「いばらき地域づくり人材育成講座」が開催され、「新しい協働のかたちを求めて」をテーマに9月から12月まで延べ4日間実施されました。日立市からはコミュニティ単会から13名、行政から2名、ボランティア団体から1名が参加しました。

地域づくりで課題になっている① 独居高齢者の増加② 高齢者と若年



グループワークで意見交換

世代との融合③ 地域づくりにおける行政と地域づくり団体との連携④ ボランティアへの参加促進などについて、専門家などによる講義やグループワークを通し、地域の課題を自ら発見し、その解決のための手法や行

政との連携など、地域づくりのリーダーとしてのレベルアップを図りました。

受講者の豊浦学区の吉田圭吾さんに感想を聞きました。

■各地域の活動状況や現状の課題への対応策について専門家のアドバイスを受けられた。貴重な経験。

■受講者はNPO活動家、学生、ボランティア相談員、県・市の職員など幅広く、課題も多岐に亘っており、熱心な意見交換と交流ができた。

■仲間意識も芽生え有意義な講座。

少子化に向けて新たな教育環境づくり 中里学区コミュニティの取り組み 日立市内の小中学生の誰でも中里小・中学校への入学、転校が可能！

中里学区は高齢化率45%、少子化率6%と少子高齢化が著しく進んでおり、中里学区コミュニティ推進会は中里独自の少子高齢化施策に取り組んでいます。高齢者のために中里助け合いタクシーを運行、高齢者の活動を支援しています。また、中里から学校を無くしたくないという全住民の思いがあり、小・中学校の児童や生徒を増やす取り組みをしています。

少子化に向けた中里学区の取り組み

100名以上在籍していた中里小・中学校の児童・生徒数は、この5年間で45名（1月現在）にまで激減しました。このままでは中里から学校が無くなってしまうと、学校・PTAをはじめ多くの住人が心配を始め、3年前からコミュニティの課題として取り組むことになりました。

学校の存続と中里の小・中学生を活気づけるため、他学区から小・中学生を受け入れ、児童や生徒を増やす必要があるとの結論になり、実現に向け検討をしてきました。第1に現在の児童・生徒の保護者の同意を得ること、第2に学校では魅力ある中里独自のカリキュラムと教育を実施してもらうこと、第3は日立市教育委員会に市の制度として認めてもらうこと、第4は中里学区コミュニティ推進会の理解を得ることでした。

4つの条件を解決するため2年前から教育委員会や学校の指導、支援

を得て、10月17日に児童・生徒の保護者、地域住民に最終説明会を実施、他学区の小・中学生の25年4月からの受け入れが実現しました。



魅力ある教育の取り組み

小中一貫教育、少人数教育で学校独自のコミュニケーション科では、生きた英語を学び、外部の専門家による伝統文化の体験学習をします。小学校では常駐のALTによる生きた英語学習が小学1年生から週1時間実施されます。中学校では他校より1時間多く学び、ALTによる英語でのコミュニケーション力をつける授業です。伝統文化の学習では落語や能楽などを体験、文化祭等で成

果を発表します。少人数による教科指導で学力を伸ばしたいという児童や生徒にも絶好の環境です。

市内全域から児童・生徒募集

募集人数は各学年とも在校生と合わせて10人程度。定員に達するまで随時。詳細は学校ホームページを参照。知人等にご紹介ください。

伝統行事はコミュニティで継続

中里小学校の伝統行事「まゆ玉集会」は20数年続きましたが、児童や保護者の激減で、小学校行事としては実施困難となりました。中止は子供たちにとっても寂しいと、長寿部の提案で「中里どんど火祭り」として実行委員会を実施することになりました。1月19日に中里中学校グラウンドに正月飾りやお札など持ち寄り、御岩神社神主の祈祷後に御焚きあげ、交流センター玄関前にはまゆ玉飾り、参加者は焼き鳥、豚汁、味噌おでん、焼き芋、いそべ餅、きな粉餅など模擬店で楽しみました。

BRT運行を起爆剤に南部4単会が共にまちづくり

平成25年3月25日、日立電鉄線跡地を専用道路として整備して、路線バスより利便性の高い新交通「バス高速輸送システム（BRT）」が公設民営方式で運行されます。

平成23年8月に運行計画や利用促進策を検討する「新交通導入事業推進会議」が設置されました。地域コミュニティ代表（久慈、大みか学区）、企業、学識経験者、国交省関東運輸局、警察、運行事業者、行政で構成されています。この会議は現在「ひたちBRTサポーターズクラ

ブ」と改称、新たに学校、地域商業者代表が加わり、会長は久慈学区コミュニティ推進会の須田昭会長が務めています。

第1期の運行区間「おさかなセンター～大みか駅東口」までの延長約4.2Km、所要時間は約10分。BRTの利便性や快適性などを積極的にPR、日立商業高校や茨城キリスト教学園を訪問して利用促進活動など様々な取り組みを行っています。

久慈学区はもとより南部地区はBRTの運行に大きな期待を寄せており、久慈浜活性化の起爆剤にしたいと活動を展開、その一つに若い人たち中心の「久慈浜を元気にする会」



を設立。南部図書館やLNG（液化天然ガス）基地の建設などで漁業の町も大きく変わろうとしています。

今こそ「南部の夜明け！」南部は一つということで、水木、大みか、坂下、久慈の4つのコミュニティの会長が定期的に話し合いの場を持ち、共にBRTを利用した活力あるまちづくりを進めています。



単会リレー訪問 特色ある活動を紹介 (12)

日立市には概ね小学校区をエリアに、活動をしている23のコミュニティ単会があります。それぞれの単会では地域福祉、防犯や防災、青少年育成、環境、生涯学習などのテーマで、住民と共に特色のあるまちづくりを続けています。今回は、中小路学区コミュニティ推進会和油縄子学区コミュニティ推進会の活動を紹介します。

みんなが元気で笑顔のまちづくり

中小路学区コミュニティ推進会

日立市民会館の3階にある中小路交流センターで、中小路学区コミュニティ推進会の矢部敏晴会長と福地烈事務局長から取り組みを伺いました。

住民が健康で住みよい地域をつくるため各種団体と綿密な連携をとっています。コミュニティ活動活性化のため、みんなが元気で笑顔のまちづくり、ふれあい・助け合いのまちづくり、子どもたちがのびのび育つまちづくり、安全・安心のまちづくりを重点に事業を行っています。

地域活動を通して子どもたちが健全に育つために、地域の役割を考えていきます。小学校の「朝のあいさ

つ運動」、秋季大運動会での「さわやかマナーアップ（あいさつ・声かけ運動）」などには地域から参加、毎月1回実施している地域一斉清掃には子どもたちが参加しています。



朝のあいさつ運動

小学校との連携事業の一つとして中小路地区クリーンアップ大作戦には全校児童が参加しています。学校は地域の行事への積極的な参加を通して、子どもたちの奉仕の心を育て

るとともに、地域へ愛着をもち、地域の一員としての自覚を高めてほしいと願っています。

昨年10月の三世代健康ウォーキングでは国営ひたち海浜公園に行き、真っ赤なコキアの丘でクイズラリーを楽しみました。万歩計をつけウォーキングし、その歩数で賞品が決まる仕掛けや、花を楽しみながら話も弾み、参加者の満足度も満点だったようです。

中小路学区コミュニティホームページに、ツイッター・フェイスブックのページもあります。twitterのアカウントは「なまかるしえ」。中小路コミュニティ推進会や交流センターのリーダーたちがつぶやいています。

事業の持ち方に様々な工夫

油縄子学区コミュニティ推進会

周辺には学校や病院が建つ、落ち着いた環境の油縄子交流センターで益子功喜会長にお話を伺いました。

取材の日は、平成24年度「健康いばらき21・元気アップ大賞」を受賞した「ステップクラブ」の皆さんが楽しそうに運動している最中でした。同クラブは、コミュニティ推進会が主催するクラブで、健康体操を行うほか、地域のイベントなどにも協力している油縄子の元気を象徴するような会だそうです。

学区内には油縄子小学校、多賀中学校、多賀高等学校、日立特別支援学校があり、コミュニティ広報紙に

学校紹介欄を設けて紹介しています。

また、青少年育成部の活動が盛んに行われています。コミュニティが主催する「子供スポーツクラブ」は卓球と別の種目を組み合わせて月2回実施します。月1回の「わくわくクラブ」は、工作や料理、かるたなど、スポーツ以外のものを地域の人を講師に迎えて実施します。夏休みには「わんぱくビレッジ」で、宿泊を伴う様々な体験をさせます。おはなし会や人形劇、お祭りなども行って、子供たちが様々なものに挑戦できる機会を多く設けて、バランスのとれた事業による健全育成に取り組んでいます。

防災訓練は地域の運動会と組み合わせ実施しています。24年度は

茨城県・日立市総合防災訓練に合わせて実施、避難所が設置される油縄



かるたで仲間づくり

子小学校に600人が避難する訓練に加えて、ヘリコプターによる避難者救出訓練なども行い、例年より多くの方が参加しました。訓練後は、地域別集団対抗の運動会を楽しみました。異種事業の組み合わせにより、参加者も多くなり盛り上がりのある事業になっています。